

井伏 文学の総集成

— 井伏鱒二の近業をめぐって —

磯貝英夫

最近、井伏鱒二の新しい著作が、ひきつづいて二冊出た。『海揚り』（昭五六・一〇、新潮社）と、『荻窪風土記』（昭五七・一一、新潮社）との二冊がそれである。そして、それは、この老作家のおとろえぬ力をあざやかに示して、井伏ファンを喜ばせたが、それだけではなく、そこには、この作家のいわば極限の風姿があるとの思いを禁じえないものがあった。むろん、その本命は、長編『荻窪風土記』であるが、短編集である。『海揚り』も看過することはできない。

『海揚り』は、表題作のほか七編が収録されており、「序」には、「この集の数篇は、三、四年前に書いた『兼行寺の池』以外は、それを書き終る前後の頃に書いた私の見聞実記である。」とある。つまり、いわゆる小説は『兼行寺の池』だけだということだが、素材的にはとにかく、創作としての明瞭な骨格を持っているのは、巻頭の『海揚り』と、巻末の『兼行寺の池』との両編である。

むろん、最近の井伏の筆は、創作とか随筆とかの区分をこえてしまっているところに特色があつて、両者の区分は無意味に近くもあるのだが、力の入れかたにおいて、おのずからの差は見る言つてよさそうである。『荻窪風土記』も、「あとがき」には、「小説でなくて自伝風の随筆のつもりである。」とあるが、その力の入れ具合は明瞭に創作のものである。それは、たとえば「半生記——私の履歴書」（昭四五）と比較してみれば、よくわかることである。

「海揚り」（昭五四・一二「新潮」）は、世間への苛辣な目の光った井伏リアリズムの一例を代表する佳作である。

△海揚り△とは、瀬戸内海からひきあげられた、むかしの難破船に積載されていた古備前を言う。「汐くぐり備前」とも「上陸備前」とも呼ばれ、骨董界で珍重される焼物である。△私△（井伏）は、あるとき（昭五二）、未知の人から、海底の古備前をひきあげる催合に参加しないかとさそわれる。むろん相手にしないうが、むかし、疎開中に、平田八春という中学同級生の骨董屋から、この汐くぐ

り備前の知識を得たことを思い出し、その思い出話は平田の頓死にまで及ぶ。催合への参加のさそいは三度かかり、△私△は、古備前研究家の桂又三郎に問い合わせ、桂の私家版『応永窯と海揚り古備前』という書物を送られる。そしてまた、岩那という法律に詳しい友人から、海底にある遺失物の法的扱いについて聞く。

以上がこの作品の粹組である。現在から過去へさかのぼり、また、調書による補足を加えるといった、この作家独特の手なれた芸による、軽やかな展開である。しかし、そこに映し出される、文字通りの堀出しものをめぐる人々の欲の葛藤はすさまじい。

海揚りがはじめて世に出たのは、大正八年。錨目当てに海にもぐった潜水夫が最初の発見者で、昭和十年ごろから古備前が流行しだすと、骨董屋や数奇者が金を出しあつて、引揚げ作業をはじめ。昭和十五年ごろの岡山市の陶守産科院長の打込みかたは、とりわけ、「ちよつと異常かと思はれるほど」で、八か月間、潜水夫を三人とりかえて、海底を掘りまくった。すると、これを横取りに来る男がいる。現職の刑事や、覆面した目利きの老人が candari する。何某組の幹部などもわりこんでくる。さらには、新品を海底に沈めてひきあげ、それを売りこむ人間が出てくる。

さながら井伏流喜劇の世界でもあるのだが、作者は、それを戯画には仕立てず、さらりと説明して、古備前の古雅と人間のあさましさとが、あざやかな対照となつてうかがひあがる。病院長の執着は金ばかりでもないようだが、骨董の魔力につかれて常識を失うおそろしさがよく出ている。しかも、それを書いて、筆が酷に走らないのは、作者自身、美の持つ魔力や、堀出しものときめきを決して他人事とはしていないせいでもあるだろう。

作品の中ほどに、一枚だけ見つかった経瓦を、身寄の者が遭難者の供養のために海中に投じたものとする推定にふれて、「さういふ見方をすると、経瓦を投入するときの『どぶん』といふ音が聞え、潮騒の音まで聞えて来るやうな気持がす

る。」という一文が出てくるが、これこそは、この作品を照らしだす光源にはかならず、これに向かいあっているのが、「その本（『応永齋と海揚り古備前』）を読み終ると、桂さんがこんな風に言っているやうな気がした。／『海揚りのことと右往左往した人たちの話なら、この本のなかに書いてある。こんな作業に關係してゐると、海揚りの現物を手に取ったとき、一瞬、心に閃くのは売買価格の数字である。さつと数字が頭に浮かぶやうなものである。』」という一節である。作者は、このひかえめな呼応におのれの感慨のすべてを託しつつ、あとは、淡々と記録の筆を進めているわけで、そこに、人生のある相があざやかに立ち現れてくる。これは、やはり、いわば過不足なく枯れてきたとも言うべきこの作者の極地をもっとよく示す名作と言えるだろう。

「海揚り」が井伏リリズムの極に立つ作品だとすれば、「兼行寺の池」（昭五三・一一五、『新潮』）は、井伏が久しぶりに書いたメルヘンであり、無類に楽しいというばかりでなく、井伏宇宙の全円はこちらのほうにあると言つてもよさそうである。

舞台は、昭和五十二年の越後の過疎のいなかである。A私Vは、スプーン工場などを見学する団体旅行に途中まで加わつて、その村の兼行寺を訪ねる。その寺で育てられて、裏の池に住みついた野鴨を見るためである。その住職とはかねてからの知り合いだが、住職一家は多忙で、会うことができない。松田松五郎経営するところの「鼎村ペンション第一号館」という民宿に泊まると、翌日、同家で、硫黄島で戦死した二兄弟の三十三回忌の法会が行われるという。そこで、その日の夕方、鴨を見に行き、翌日は、ペンションの障子の隙間から、母屋の法事を小型双眼鏡でのぞいて、その儀式の一部始終を記録にとる。それがあらかた済んだところで、もう一度鴨を見に行つて、村を離れる。

こんなところがあら筋だが、この作品には、およそ四つほどの特色の複合が見られる。

まず第一は、昔なつかしい、おかしみに満ちた井伏流デフォーメーションの登場である。過疎村における松田松五郎民宿屋が、「鼎村ペンション第一号館」になるといふようなところが、まことにおかしい。鴨を見にゆくと、草取婆さんがいて、「俺あ、喋ちつよのよだども、この寺の葬礼は安あがりでの。戒名の包銭は、居士料が二万円だ。」などとしゃべりだすが、また至極楽しい。その婆さんが畑を耕すと、鴨が、あわただしく飛んできて、腰巾着になつて、みみずを

あさるのである。ペンション第一号館の障子の隙間から、双眼鏡で法事をのぞくというのが、また、まさしくむかしの井伏流である。

しかし、このデフォーメーションは、風俗事象（自然をも含めて）への執念的ともいへばいえる関心および記録欲求と同居しているのであって、これが第二の特色である。兼行寺の檀家が、過疎で十年間に二百戸から八十戸に減つてしまつたことから始まつて、その寺の経営、お布施の高、ペンションの間取り、農家の新築築ぶり、農協での買物、畑の作物などが、こまかく叙述される。法事になると、これは、ほとんど民俗学の記録の観を呈する。和尚の動き、あいさつも、全部書きとめられる。わからないお経のなかも、あとで和尚に問いあわせたことにして、書きとめられる。お齋の料理の品目も記録され、珍しい三献の式も、こまかく説明される。

こうした記録によつて浮きあがってくるものは、第一には、戦争期から昭和五十年代の繁栄期にかけての農村の大きな変貌であり、第二には、にもかかわらず、なお温存されている古い伝統・習慣である。作者の嗜好が後者の方向に向かつていることは言うまでもないが、それはとにかく、こういう記録性によつて痛切に認識されるのは、リアルな時の流れである。この点ではメルヘンどころではない。

第三の特色は、戦争問題である。三十三回忌は、ほかならぬ戦死者のものであり、和尚の法話も戦争にふれ、つづく客人たちのスピーチもすべて戦争にかかわりあう。和尚は、「殺しあひの地獄が戦争といふ実体である。」と言ひ、「……絶対、わしら戦争してはいかんことを、今この場で誓つてもらひたい。」とも言ふ。これが本音であることは、寺の檀信徒会館で、靖国派が軍歌や軍艦マーチを流したとき、和尚が「火の出るほど腹を立てた」挿話が書きこまれていることによつてもわかる。

蒙古兵から蒙古の追分を習つたという、兵隊あがりの元陸軍少尉、今コンニャク製造業者は、「北満の野を駆けずりまはらして居つた日本軍人は、無駄なことには現をぬかして居つたわけでありました。」と言ひ、溥儀執政の就任記者会見に立ち会つたという元軍人は、「当時、日本陸軍は日の出の勢ひのやうでありましたが、その実、転がる石で満洲に押しかけたドン・キホーテでありました。さうしまして、溥儀執政を宣統皇帝とお呼びするやうになつたのを喜んだのが、ドン・キホーテのお茶坊主のそのまたお茶坊主の、自分どもでありました。」と言ふ。

むろん、こうしたスピーチは、記録中のつくりごと部分で（客人たちが歌う前に自己紹介するのはお斎の常例とあるが、本当か？）、ここには一つの主題が認められていると見てよい。井伏という作家の戦争への決して褪色しない激しい思いが、このメルヘンふうの作品をも貫いているのであって、これは、この作家の特徴として注目すべきことである。

第四の特色は、野鴨に結晶される井伏独特の詩情である。池へ行く途中には、雛をつれた母雉が石塔のあいだを縫って歩いている。鴨が、「首を前方に長く伸ばし、徳利型の尻を重々しく後方に突出して」飛び立ち、三本松の脇の大きな岩の上に止まると、池に残された家鴨が二羽、岸に아가って、「火のついたやうにけたたましく」鳴き騒ぐ。婆さんは、鴨を呼びもどそうとして、急いで畦を耕しだす。いかにも井伏流の、ひなびた、童画ふうの詩である。われわれは、すでに「しびれ池のカモ」を知っているし、早い「屋根の上のサワン」も自然に思いおこされる。年老いた人私Vがはるばると尋ねてきた詩——夢は、ここに、久しぶりにほとんど遺憾なく結象しえたのである。

以上のような四つの、抽象的には異質とも思われる特色が、この作品では渾然として同居しているのである。しかも、この四つは、井伏の持つほとんど全要素と言ってもよく、それがコンパクトに集約されている意味で、私はとくにこの作品に注目したいのである。

『海揚り』は、以上の二名作を最初と最後におき、つづく粹組として、「御隠居」と「蜜柑の木」の二小編をすえ、そのなかに、まず、「木山捷平の詩と日記」「上林眺」の友人作家もの二編、次に、「プキテマ三叉路と柳重徳のこと」「徴員時代の堺誠一郎」の戦争もの二編を配置するという構成になっている。うち、戦争ものは、まじめな徴員仲間を命を理不尽に絶った軍・戦争への告発意識が強く、それが、「兼行寺の池」のなかの戦争論ともひびきあって、この作家のなかで持統する反戦意識に強い感銘を与えられるのであるが、作品論としてはとくにとりあげられることもないだろう。『荻窪風土記』へ急がなければならない。

二

『荻窪風土記——豊多摩郡井荻村』は、「豊多摩郡井荻村」の総題のもとに、『新潮』昭和五十六年二月号から五十七年六月号まで、十七回にわたって連載された作品である。若干の部分削除などは見られるが、連載時と単行本とで大きな

変化はない。

すでに記したように、作者は、「あとがき」で「小説でなくて自伝風の随筆のつもりである。」と書いているが、それはそうにしても、その念の入れかたは、なみの随筆のそれではない。つづいて、「こまごましたことが多いため、筆が渋滞すると辛いので聞き書きの調子のやうに仕向けながら書いた。」とあるのも、逆には、筆を渋滞させかねない重い意図を語っていると言ってよいだろう。その意図の第一は細部の正確を期することにあっただろうが、それだけではなく、芸術的な形象化、効果への入念な配慮も見られるのである。

とくに初章の「荻窪八丁通り」は秀逸で、その成功が十七回連載のエネルギー源になっているようにも思われる。

まず、長谷川弥次郎という鳶の長老（元小作）を登場させ、その老人の話として、関東大震災前には、品川の汽笛が荻窪まで聞こえてきたことを記す。そして、それによって、時の流れが一挙に浮かびあがる。ついで、弥次郎が大根などを大八車にのせて、真夜中に出発すると、新宿大塚寺あたりで夜が明ける話、途中の坂道では、一回五厘か一銭（第一次大戦後は二銭か三銭）で立ちん坊に後押しをさせる話に移る。やがて、その車を牛にひかせるようになり、ついで馬にかわる。大八車がゴム輪四輪車になるのは大正十三、四年。大正十四年には、農用荷馬車が井荻村に四十六台あったという。こういう話題によって、今度は、身近な生活のがわから時の流れが浮かびあがる。これは、この作品の基本主題を冒頭一挙に提示した、みごとに導入である。

こうして、昭和二年筆者荻窪転入の話に入るのだが、話は一直線には進まず、森泰樹「杉並区史探訪」によって、徳川家泰開発の、蹄鉄屋と一膳飯屋をともなった青梅街道の話、矢嶋老人著『荻窪の今昔と商店街の変遷』によつての、大正初期の荻窪界限の姿などに筆が旋回する。江戸への筆の遡及は、この後もしばしばあらわれて、この作品に深い時間の奥行きをあたえる重要な要素であるが、それが、すでに早くここに登場するのである。

そして、学生時代（大正十一年ころ）に、井伏読者にはおなじみの青木南八と天沼教会を訪ねた話、昭和二年、貧乏な文学青年の気楽に住めそうなところとして、この地に家を建てようと思ひ、野良仕事の百姓から、坪七銭、下肥を他へ譲らぬことという契約で借地をした話に入る。そのあと、二、三年であらかたなくなつた石地蔵の話、昭和四、五年にはオハグロドブそっくりになつてしまつて、そこへ気の毒に大雅堂主人が落ちこんだ千川用水の話が、昔の詩を引用して展開さ

れる。そして最後は、そのオハグロドブの話を清めるように、昭和二年から出入りの植木屋木下に、江戸期のまいまいず井戸の残欠の存在を五十年ぶりに教えられる話に移って、筆が止まる。

以上は、実はかなり整理した要述であって、実際の叙述はもっといろいろくんでおり、情報量も多い。「あるとき矢嶋さんに『大正初期、朝鮮原のクスギ林(潜水一丁目あたり)のなかには、どんな草が生えてみましたか』と訊くと、ゆつくり考へながら、ススキ、フキ、シドミ(クサボケ)、ヨミナヘシ(白と黄)、山ユリ、ツリガネ草、チガヤ(ツバナ)、ヤブクワンザウなど生えてゐたと言つた。」というような具合である。やがては、これが次のような叙述にもなる。「すでに五十年以上も前のことである。確かな記憶が無くなつたので、当時、この辺に住んでゐた葦の木下の記憶を借りる。即ち、武威野湯の右手は、中込といふ電気屋であつた。(現在、改築して以前からの営業をつづけてゐる)その右手が床屋、それから時計屋、空地、空地、区劃整理の横丁。その角店が長田屋といふ乾物店。(これは昭和三、四年ごろに開店した)次が、近眼の葦春といふ葦職の家。(後に、畳屋の店になつて、今は蕨蔭やスリツパなど売つてゐる)次が空地、田中医院、空地、空地。次が『大高原つば』といふ広い空地になつてゐた。」

〔平野屋酒店〕
頻出するこういう記述が、しかし、情報過多の煩瑣な印象をほとんど与えないのは、まさしく至芸と感ぜられる。その主要なコツは、こういう精確な事象の記録と、おおらかな挿話とのたくみないりくませかたにあると見てよいのだが、その根本は、こうした事象の列記が、作者のやみがたい知的要求に支えられて、いささかも空疎化していかないことにあると言つべきであろう。われわれは、作者の強い知的願望に同化して、まさしく知りたいたいことを知るといふかたちで、次第に、一つの風土の奥深い歴史に立ち会うことになるのである。そのときの作者の喜びは、そのまま読者の喜びとなる。

なお、ここで注目すべきことは、最初に長谷川弥次郎という、昔小作の葦の長老を登場させ、最後には、五十年年つきあつてきた木下という植木屋(葦の木下とあるのも同一人物)を出して、しめくくつてゐることである。この照応は、井伏がその第二の郷土を眺める視座が、徹底して下からの視座であることを示して、遺憾がない。これは、『荻窪風土記』全巻に貫徹する特色である。荻窪八丁通りの矢嶋さんというのは民間の郷土史家であろうが、そういう人の目を借りても、お役所の資料などは一顧もしない。少なくとも表にはいっさい出さない。こ

れは、まちがひなく意識的な姿勢であつて、こういう視座の貫徹から、なつかしい井伏的宇宙が創成されるのである。

むろん、ここに登場するのは、そういう土地の生活者ばかりではない。作者がその一人である文士たち——というより文学青年たちが、この冒頭以降、次第に多数登場することになるのだが、この連中も、世の権力や金力とは何の関係もない、かよわい在野の浮草にすぎない。しかも、作者は、かれらを扱って、葦の長老や植木屋よりも優位に立たせることは絶対にしないのである。というより、少なくとも私個人は、この作品の全体において、その真打ちは、名のある文士たちではなく、だれが知るわけでもない市井の庶民たちではないかとの思いが強いのだが、そのことは、最初と最後に最もありふれた生活人をおいたこの初章の構造において、すでに早く、ひそかに示されていると見ることができるのである。

このことは、また後にもくりかえす話題として、この初章のあたえる感銘を一口で言うとすれば、そのなかのひとところであつてもふともらされて「時のたつのが早すぎるやうな気がする。」ということばに集約される。この何気ないことばが、読みおわつて、ずっしりした重みを持つてくるのであつて、この、まことに平凡でしかし奥深いことばこそは、実は、『荻窪風土記』全編の基本主題でもあると言つてよいのである。

あとは急がなければならぬ。第二章と第三章は、初章にある、関東大震災前後での大きな変化の指摘を受けての、関東大震災に遭うの記であり、全巻中の雄編である。

「ところがじりじりと暑くなつて、いつの間にか東の空に大きな入道雲が出た。それも今まで私の見たこともないやうな、繊細な襞を持つ珍しい雲であつた。後日の新聞でわかつたが、これは積乱雲といふ雲である。(中略)堂々として美しい雲であつた。」

「積乱雲は日が暮れると下界の火の海の光りを受けて真赤な色に見え、夜明け頃になるとすつかり黒一色になり、朝日が出ると細かい襞を見せる真白な雲になる。はつきりと赤、黒、白と、変幻自在に三通りの色に交つて行つた。」

「日が沈むと、昨日と同じやうに下町の方の火の海が空の積乱雲を真赤に見せ、夜明けになると雲は黒く変色し、太陽が出ると白い雲に見えた。」

「四日目には、燃えるものは燃えてしまつた。積乱雲は熱氣と閃光があるせむか、四日目にも空に出た。」

以上は、地震時の雲の叙述を抜き出したものだが、これだけの抽出によっても、作者の力の入れかたが、なみの随筆ものところがよくわかるであろう。

主人公は、カンカン帽に日和下駄といういでたちで、七日目に東京を退散し、立川まで歩き、そこから汽車に乗って郷里へ帰るのだが、その途中で、狹窪一帯を通過するのである。流言による暴動へのものしい警戒ぶり、避難民へのあたたかきもてなしとの住民の二側面がわざわざ写し出される。苦しい避難行であるが、ここで注目されるのは、作者が、おのれの苦痛や体験を別あつらえに仕立てることをいっさいしていないことである。というより、この非常体験においても、△私Vそれ自身は決してヒーローにはならず、終始、目として機能しているのである。

たとえば、△私Vは、車中で、着物に荒縄の帯といういでたちの法科大学生と同居するのであるが、汽車が甲府に着くと、接待に出ていた女学生集団の一人が、自分の赤い腰紐を抜きとって大学生に手渡し、大学生はめでたく着物に赤い腰紐姿になる。そういう挿話が興味ぶかく写しだされるのであるが、そのとき、△私Vは、目そのものになって舞台から姿を消している。△私Vが姿を現すときも、かれは、この大学生とまったくおなじレベルで出現するのであって、かれだけが大映しになることは絶対ない。実は、これは、井伏鱒二の全作品に一貫する基本特色なのであるが、ここでも、そのありかたは貫徹しているのである。

しかも、作者は、逃げ出した一庶民としてのおのれの視点から外へ出ることはまったくしない。そして、そこに基本的に流れているのは、多くの親切を受けた者としての、市井の人々に対する信頼の感情である。むろん、かれらをとらえた荒唐な流言蜚語も書きとめられているが、それも、結局は、「至るところで行きさぎの間違ひが起きた。今だにそれを問題にする人があるが、みんな流言に逆上させられてゐるのだから仕方がない。」（「町内の植木屋」）として、許されるのである。観念的知識人はこれを心外とするだろうが、井伏の実感的な下からの視座は、ここでも貫徹しているのである。

この震災話の最後には、震災後の文壇情勢の激変のなかで、△私Vが困惑とあせりを感じることを書かれるが、その延長線で、昭和二年、家郷の兄に金を無心して、狹窪に家を建てる話を書いた「平野屋酒店」がくる。平野屋酒店とは、家の建つあいだ下宿した店である。ところが、最初に支払った建築代金を仲介者と棟梁にごまかされ、やむをえず、高利の金を借りて、建築を続行させ、最低の普

請で間にあわせることになる。（のち、兄の再度の送金によって返済）全稿中も、金の無いのが気になって、貧乏には慣れてゐるつもりである、自分はおも、貧乏には飽き飽きしたと思ふやうになつた。」という程度の叙述があるだけで、家を構えた直後にあつたはずの結婚のことなど、全然出てこない。ただ、一言、「高利の金を払つてしまつた後、それから一年たつても二年たつても、また私が家内と所帯を持つて子供が生まれてからも、毎月のやうに月末の支払ひがうまく行かなかつた。」と、多分前後のつじつまあわせに、もっとも目立たぬかたちでふれられるだけである。

つまり、ここでも、△私Vは決してドラマの主役にはなろうとしないので、そのかわりに、隣りにりっぱな家を建てた本望さんがやがて亡くなり、その奥さんが、こっそり立ち退くときに、無言の置き土産としてヒノキ材のはしごをおいていったことが、くわしく書かれる。こんな自伝などというものはあるものではない。

この章の後、「文学青年喪れ」「天沼の弁天通り」「阿佐ヶ谷将棋会」「続・阿佐ヶ谷将棋会」と、文士交遊録を主とした章がつづく。

これらの章での筆の基本特色は、それが、対象の著名性によりかかつて読ませる、世の一般の文壇筆叢のくさみをほとんどまぬがれていることにある。とくに著名者呼びよせようとはせず、また、無名と著名の区分もほとんどない。

「人間は大なり小なり群れをつくる習性を持つてゐる。馬もこの通りであるといふ。（中略）とかくメダカは群れたがるといふが、それで結構だと私は思つてゐる。」

「お互にいい作品を書くのが念願だが、どんなに力を入れた作品でも百点満点の作品といふものはあり得ない。しかも、いっだつて間に合はせのものしか書いてゐない。先づ、今後何年か生きるとして、短篇何十篇かのうち一篇でもいいから、『ああ書いた』と、しみじみ思ふことの出来るものが書ければいい。お互にそれが出来ないから、毎年のやうに翌年廻しの順に任してゐる。」

「阿佐ヶ谷将棋会の連中は、ABCDE……お互に世間的には丙と丁との間ぐらゐるの暮しをしてゐたが、お互に意地わるをする者もなく割合に仲よく附合つてゐた。ABCDE……共に身すぎ世すぎで原稿を書きながら、時にはそこに生き甲斐を感じるべきだと思ふこともあり、ろくでもない原稿書いても締切の関係だから仕方がないと口をぬぐつてゐることもある。ABCDE……共にお互さま

だから、もしこちらを軽蔑する手合があれば、その者を仲間と思つてやらないだけである。」

これが、この交遊録の基本姿勢である。弱い者が、貧しさのなかで、その弱みをさらけだしながら、とにかく一生懸命に生きていく——そういう生熊への共感覚といわりの感情とが、これらの記述を支えているのであって、ここには、エリート選別意識といったものはない。あるのは、もっとも無器用に、正直におのれ自身を生きて、たくみな世間などできない文士たちへの親近感である。だから、ここには、特別あつかいのエリート性奇行などは、かけらも出てこない。それぞれに個性的ではあっても、どこにでもある性癖やうしろ姿だけが描かれるのである。たとえば、中村地平は将棋が弱くて、だれにでも負けるので人気があり、外村繁は心から運動会が好きであったというようなことである。

そういうものであれば、それはむろん文士たちの専有物ではないわけで、だから、作者は、一般の生活者たちと文士とのあいだを自由に移行するのである。

ところで、時代の波はこういう文士たちをも容赦なくまきこんでゆく。戦争である。阿佐ヶ谷将棋会のなりゆきを追って、筆は、会員二人の応君におよび、さらに、井伏を含めての三人が、陸軍徴用令を受けて、サイゴンに運ばれるところまで進んでいる。

そして、これらの章につづく「二・二六事件の頃」では、その筆に触発されたように、二・二六事件の体験が記されて、すぐれた章になっている。二・二六の前日には、皇居のお濠にユリカモメが何百羽も集まり、皇居の上に出てくる太陽を白い虹が横に突き貫いているのを人私Vは見たという。そして、近くの渡辺教育総監邸の襲撃については、銭湯の浴客の話、葦の木下の話、ピノチオの主人の話などで構成して、実感がある。ここでも、視座はもっぱら庶民大衆のうえにあつて動かない。

なお、この章の後も、時間は自在に前後させつつ、岩波書店の『日本史年表』の年々の項を書き写すなどの工夫することによって、作者は、戦争に傾斜してゆく時の流れを浮きあがらせることにつとめていく。井伏の時間において、戦争は、やはり圧倒的に大きな位置を占めているのである。そして、作者が、軍人や戦争にふれるとき、おだやかではあるが、ほかのところではほとんど現れない、明瞭な嫌悪と批判のことがばきさみつけられることが、注目されるのである。

「二・二六事件があつて以来、私は兵隊が怖くなった。おそらく一般の人もさうであつたに違ひない。」

「当時は、百人に一人ぐらゐる軍人を好きな青年がゐた。」

「茂索さんは素早く広辞林をめくるとその頁を抜く、菊池さんが「義に赴く、菊池寛」と署名する間に、『おもむく、コトコトあゆむ』と辞書の解説をゆつくり読んだ。秘書役として気のきいた処置であつた。」

「兵隊に取られた青柳は気の毒だといふよりほかはない。」

「この年、東条首相の『戦陣訓』を通過、松岡外相、ソ聯経由でドイツ、イタリイ訪問に出発、ゾルゲ事件があつた。いつ戦争になるのかと、びくびくさせられる日が続いてゐた。私は将棋と釣に凝るやうになつて、まじめに原稿を書くやうなことはなくなつた。」

「輸送指揮官の立会ひで、名簿にある自分の名前の下に認印を捺するのである。それと同時に、自分は日本軍人になつたことになる。さういふ制度の因に生れたのだから宿命といふよりほかはない。」

書き写しながら、本当の思想とはこういうものだと思はず言いたくなる思いがある。こうしたことばの前では、どんな注釈も浮きあがつて聞こえるだろう。

さて、文士中心の諸章（「善福寺川」「外村繁のこと」はもうふれない）のあとには、「阿佐ヶ谷の釣具屋」「町内の植木屋」の二章がくる。なかでも傑出しているのは後者で、荻窪地方の歴史を、徳川將軍の御陣野であつた江戸時代までさかのぼって、幽遠のおもむきがある。植木屋の木下は、森のほとりで狸が満月に照らされて腹鼓を打つのをしているが、そういう森の残存が、幕府の苛酷きわまる御法度のせいであることも、きちんと書かれている。そして、これが、十一章をへだてて、初章とみごとに呼応しているのである。

戦後は、「小山潜の孤独」の章を経て、「荻窪（三毛猫のこと）」「荻窪（七賢人の会）」の二編で打ち止めとなっている。多くの文士たちの生と死の記述のあとで、疎開地からの帰還の直後から十四、五年生きて死んだネコの叙述がくるのも絶妙だが、全編をしめくくって貫録のあるのは、やはり七賢人の会の章である。

昭和三十七年、「自分にとつて大事なことは、人に迷惑のかわらないやうにしなから、楽な気持ちで年をとつて行くことである。」と考へるようになった人私Vは、町内の古い知りあいと懇親会をつくる。おでん屋おかめの末さん、魚屋の魚金さん、菓子屋の宝菜屋さん、武威野湯の中村さん、接骨医の吉田さん、元鉄道勤めの植松の松ちゃんとお人私Vとの計七人の会である。ところが、一年ほどで末さんが亡くなり、最近はまだ、宝菜屋さんについて魚金さんも亡くなった。

「ばたばた倒れて行くといった感じである。そのくせ私には、覚悟といふやうなものはまだ何も出来てゐない。」というのが、その感想である。

そして、その後は、荻窪の今昔に話に移る。元井荻村の人口は、昭和二年に一萬五二六四人、昭和五十四年は一五万〇九九一人。明治のころ、このあたりに、深山にしか育たない牛コロシの木が生えていたという。花に異臭があつて、家畜がきらうという。そして、最後は、次の一文によつてしめくくられる。

「牛コロシの木が生えてゐた以上、このあたりの木立は深山の面影のある幽邃な森の残缺であつたと思つていいだらう。」

ここには、時間の軸と自然の軸と生活の軸とのあざやかな渾融があると言つてよいだらうか。まことにみごとな締めである。

「荻窪風土記」は、井伏文学の総集編と見なしてよい作品である。井伏文学を素材によつて分類すると、在所もの、市井もの、歴史もの、戦争もの、仲間ものほぼ五種に分けられるが、この作品は、そのすべての要素を含有していると言ふことができる。

荻窪は、作者寓居の町でありつつ、同時に、作者は、そこを掘り深めて、そこに在所を、郷土を発見している。市井の古老たちは、そういう作者の前に、在所の人々とまったくおなじ風貌をもつて現れる。この作品は、したがつて、市井ものであると同時に、在所ものである。また、これは、歴史もの一種でもある。ここには、江戸期から今日にいたるまでの、一地方の風土の変遷があざやかにとらえているのである。実感によつて支えられたみごとな地方史と言つてもよいだらうか。そして、その歴史の中身をとりに出せば、戦争ものと言つてもよい性格が見えてくる。関東大震災を起点とし、二・二六事件を通過して、太平洋戦争へと、時代はなだれを打つのであり、その間の理不尽な権力の動き・悪を、作者はきびしく見すえているのである。と同時に、それは、そういう時代の急流のなかで、めだかのように群れて、励ましあいながら懸命に泳いでいる文士仲間の物語でもあるのである。

以上のような諸側面があるとすれば、「荻窪風土記」を井伏文学の総集成版と言つたとしても、決して過言ではないだらう。すでに私は、「兼行寺の池」に井伏の全要素のコンパクトな集約があると言つたが、それとの多少の角度のちがいを含めて、ここには、それをさらに拡大した、本格的な集成があると言ふことができるのである。

そして、私は、老作家のこの達成に深くゆり動かされるものがあるのだが、とりわけ注目したいことを一つ言つとすれば、それは、この作家が、その土地の奥深くに根をはり、土地人とがっしりかみあつて、そこから養分を吸収しているということである。この問題は、都市化の一途をたどっているわが国の現況にあつては、とりわけ重要な問題であり、この課題を追い深めるとすれば、さらに稿を改めなければならない。